



2019年9月5日放送

印象に残る症例①

がん治療後の苦痛に対して漢方が有効だった症例

にしだクリニック 院長 西田 慎二

私の前職である日本赤十字社和歌山医療センターは大規模総合病院であり、がん患者さんも多数受診をされています。そこで私は、心療内科外来だけでなく、緩和ケア外来も担当していました。緩和ケアといえば、末期癌の患者さんにモルヒネを投与しているイメージをされる方も多いかもしれませんが、これは非常に古いイメージです。実際は、早期から末期までの、あらゆるがん患者さんが対象になり、症状もモルヒネを使って痛みを改善させることだけでなく、食欲不振、倦怠感などの体の症状や、眠れない、不安、憂鬱、などの心の症状も治療の対象となります。今回と次回ともに、そのような緩和ケア外来を受診された患者さんに、漢方薬がよく効いた症例を解説します。

患者さんは、50代の男性です。現病歴ですが、X-4年初頭に腰痛を生じ、ある病院を受診したところ、骨粗鬆症と診断されました。鎮痛剤などを処方されたものの改善無く、次第に酷くなり、建築現場の仕事も出来なくなりました。あまりに痛みが酷いため、別の病院に入院したところ、悪性腫瘍を疑われました。そこで日赤に転院して精密検査をした結果、多発性骨髄腫の診断を受けました。血液内科で化学療法や自家移植をされ、X-3年末に完治と言われました。ところが、痛みはその後も強く、歩行もゆっくりで、スーパーの中でパニックになってしまうなどの症状がみられました。このため主治医より「病気は治っているはずなのに、大げさに言っているのではないか」とのことで緩和ケア外来を紹介受診されました。

この方の症状ですが、腰から背中中の疼痛が強く、座位、立位、歩行で増強します。また下

肢の筋力低下も著しく、足の踏ん張りがきかない、立ち上がる時は何かにつかまらないとダメ、歩行もゆっくりで、広い道路を横断する時はものすごく不安で、片道 150 メートルの往復がやっとのことでした。このため、自分一人での外出がものすごく不安であり、スーパーで少し家人を見失ってパニックになってしまったとのことでした。そして、主治医からは「もう治ったから、動けるし、働くこともできる」と言われているものの、とてもそんな状態ではなく、言い返せずにつらいとのことでした。この他の症状としては、足が冷えて夏でも靴下を履いて寝る、緊張すると腹痛と下痢を生じるなどの症状がみられました。

現症ですが、身長は 167cm、体重 51kg、血圧 148/73mmHg、脈拍 96/分、SDS は 33 点で正常範囲内です。脈証は細弦濡、舌証は舌質暗紅色で白苔をみとめました。腹証は腹皮拘急を上腹部下腹部ともに認めましたが、臍下不仁その他は認めませんでした。

診察をして、この方の動作などから、決して詐病のように痛みを大げさに言っている訳では無く、本当に痛みがあり、また筋力の低下があるものと思われました。そこで、この方の病態を腎陽虚と考え、牛車腎気丸と、少量の抗不安薬を処方しました。3 週間後の外来では、気持ちは少し落ち着いたものの、痛みは変わらないとのことでした。ところが、2 ヶ月後の外来では、腰背部痛は少し楽になり、座位でいられる時間も少し長くなったとのことでした。その後も次第に改善しましたが、11 月になると、冷えにより疼痛とだるさが増悪し、夜間もうずいて眠れないとのことでした。そこでブシ末を少し追加しました。すると症状はまた改善しました。半年後の外来では、「冷えも痛みもなく、夜の痛みも無くなり、睡眠も良くなりました。5 分立つのがやっとだったけど、今は 15 分立てます。歩行距離も少しずつ伸びています。前回スーパーに行った時はパニックになっていたけど、思い切って行ったら、大丈夫でした。4 年ぶりにスーパーで買い物ができました。」と、とても嬉しそうに話をされていました。さらにその後は抗不安薬も中止、牛車腎気丸のみの服用となりました。その後、さらに調子がよくなり、患者さんのほうから「一度牛車腎気丸を止めてみたい」と言われ、1 ヶ月止めたところ、疼痛が悪化しましたので再開をしています。現在初診から 3 年間フォローしていますが、内服は続けておられ、運動能力はさらに改善しており、多発性骨髄腫の再発もみられていません。

牛車腎気丸は、八味地黄丸に牛膝と車前子を加味した処方です。八味地黄丸の原典である、金匱要略には「非常に疲れていて、腰が痛く、下腹が突っ張って、小便の出がよくない人には八味腎気丸が有効である。」とあります。そして牛車腎気丸は濟生方が原典で「加味腎気丸（牛車腎気丸）は、腎の機能が悪く、腰が重く、下肢がむくみ、尿が出にくいものを治療する。」とあります。このように、八味地黄丸や牛車腎気丸は、腎の機能低下を生じ、疲労や腰痛などを生じた人に用いられる処方です。牛車腎気丸の構成生薬は、八味地黄丸の構成生薬である、地黄、山茱萸、山薬、茯苓、沢瀉、牡丹皮、桂皮、附子に、牛膝、車前子を加えたものです。地黄が補腎陰、山茱萸が補肝陰と収斂、山薬が補脾、茯苓が脾湿の利水、沢瀉が腎火の清熱利水、牡丹皮が肝火の清熱、桂皮が通陽、附子が温裏祛寒、牛膝が下肢への

引経と活血、車前子が清熱利水し、全体的にみれば、腎気を補い、腎陽を温め、利水、活血する働きがあります。最近の研究では、動物実験ですが、加齢促進マウスにおける筋肉量の増加作用があきらかになり、高齢者のフレイルに対する作用が期待できます。

ここで、漢方医学における「腎」とは、西洋医学の **kidney** の「尿を生成する」というのはたらしのみならず、生殖・発育に関与する、「精」を蓄える臓です。この精は加齢によって徐々に消耗してゆきますが、この患者さんのように悪性腫瘍などの大病をすることで大きく消耗してしまいます。また、腎は骨と密接に関係しています。「多発性骨髄腫」という病気は、まさしく骨髄の癌であり、化学療法などの治療で、腎の精を大きく消耗したことでしょう。この腎精の消耗、つまり腎虚になった結果、下肢筋力低下や腰背部痛などを生じてしまいました。このように、漢方医学的にもこの方の訴えは非常に納得できるものでした。筋力低下により動けないから不安となって、どこかオーバーに訴えているようにとらえられたとすれば、とても可哀想ですね。

鑑別処方としては、八味地黄丸、補中益気湯、十全大補湯、人参養栄湯、大防風湯などがあります。八味地黄丸は牛車腎気丸から牛膝と車前子を抜いたものですから、もちろんある程度は有効でしょう。補中益気湯は補気作用のみであり、疼痛改善作用や、筋肉量増加作用はありません。十全大補湯と人参養栄湯は気血双補剤ですから、元気を益して筋肉量増加作用はありますが、疼痛改善作用はありません。大防風湯は十全大補湯に祛風湿薬、散寒薬、活血薬を加えた処方で、ある程度有効と思われます。ただし、補腎作用としては牛車腎気丸よりもやや弱いでしょう。

ところで、もし私が漢方薬を知らなかったら、この患者さんにどのような処方を行うでしょうか。非ステロイド性消炎鎮痛剤は既に無効であり、抗うつ薬や、適応はありませんが、プレガバリンなどの神経障害性疼痛治療薬を使うでしょう。ところが、このような虚弱な方の場合、抗うつ薬による眠気、吐き気、動悸、ふらつきなどの副作用がみられることがあります。プレガバリンについても、眠気やふらつきが出るでしょう。おそらく西洋医学的薬物では使えるものはありません。このように、「虚弱な人を元気にする」、つまり補剤という薬は、漢方薬しか存在しません。

このように、緩和ケア外来でも漢方薬は非常に有用です。